

## 旧下関英国領事館

### 繁栄する国際拠点

下関は、政治の中心地である東京から離れていたにもかかわらず、国際貿易にとって非常に重要な場所であった。アメリカ、ドイツ、オランダなど欧米8カ国が領事事務所をここに設置した。イギリスは領事館を開設した最初の国であり、現在も残っている唯一の領事館の建物である。

### 多くの領事館の先駆

英国外交官サー・アーネスト・サトウ（1843-1929）は、交易船の監督や機密文書の転送のため、下関あるいは門司に領事館を設立することを提案した。最初の英国領事館は1901年、場所を借り上げて開業した。領事館の建物が完成したのは1906年であり、上海英国領事館を設計した英国工務局上海支局長ウィリアム・コーワン（生没年不明）によって設計された。

この煉瓦2階建てのアン女王朝様式の建物は入口の上に階段状の切妻があり、ベランダに柱が並んでいて、白い石で装飾されたアーチがある。煉瓦は日本の三大煉瓦生産地の一つである岸和田産で、X字型の刻印がされているのが確認できる。

装飾が施された内部は天井が高く、ドアや窓の周りには細工が施されたモールディングがあり、各部屋にはタイル張りの暖炉を備えたマントルピースがある。領事室の特に複雑な細工は、海運事務所の簡素なスタイルとは対照的である。

### 蒸気の時代の情報セキュリティ

領事館は海外の英国民への連絡拠点としての役割を担い、あらゆる種類の情報がここで交換された。領事の賓客の多くは競合する貿易会社のメンバーであったため、ビジネスが内密に行われるようにするための対策がとられた。分厚く、重いドアや壁は盗み聞きを防ぎ、鍵穴には隣の部屋の覗き見を防止するカバーが掛けられている。さらに、来訪者のプライバシーを守るため、領事館には入口と出口が独立した二つの応接室があった。こうした設計は、国際外交や情報セキュリティの機密性を反映したものである。

第二次世界大戦の勃発で日英関係は悪化し、ここでの領事館業務は1941年に閉鎖された。1954年に英国政府は下関市にこの建物を売却し、1958年から1968年までは警察が駐在した。交番であった頃、道路へのアクセスを改善するため、交差点に面した外壁の一部が撤去された。この部分は後に修復されており、煉瓦の色調の違いから、その変遷を伺う

ことができる。その後の数 10 年間に於いてこの建物は様々な用途で使用されており、16 年間考古学博物館であったこともあった。

1999 年、この領事館の建物は重要文化財に指定され、2008 年に大規模な修復工事が行われた。煉瓦の継ぎ目の間にケブラー繊維の束を通して格子状にして繋ぎ合わせるという、将来のため建物を強化する画期的な技術が採用された。

現在、1 階は下関の歴史と領事業務を紹介する博物館になっており、2 階には英国風なテイルームがある。